



〈一冊の本〉

日本社会教育学会編

『社会的排除と社会教育』

(日本の社会教育第50集)

東洋館出版社 ¥2900



わが国でも、近年「格差」問題や「新しい貧困」の問題等がクローズアップされてきた。しかし、国際的には貧困と密接に関連する広範で複雑な社会的諸問題をも含め、それらを束ねる概念として「社会的排除」という用語が使われ、世界各国の政府や諸組織でも使用され、議論されている。

日本社会教育学会ではプロジェクト研究テーマの一つとして、その社会的排除という概念に着目し、理論的検討を重ね、関連する社会教育・生涯学習活動の分析も行ってきた。本書は、数年間にわたる研究成果をまとめたものである。第1部では、「社会的排除に取り組む社会教育の論理」、「EUの社会的排除政策の展開と課題」をはじめとする理論的考察がなされている。第2部の「社会的排除の諸相と対抗的実践の課題」には、在日コリアンNPOの実践事例、「外国人の子どもたちの排除の構造と対抗的教育の原理」、「戦後ドイツにおける移民労働者に対する社会統合のプロセス」、NPO法人北九州ホームレス支援機構による自立支援活動その他が報告されている。

筆者が本書をこの欄で取り上げたのは、第3部「社会教育の実践—施設・組織化・学習論」の中に収められている神戸大学公開講座の教育的ライフヒストリー実践に注目していただきたいからである。「知的障害者の親による社会的排除経験の語りに基づく相互教育」と題されたこの報告は、実にユニークなもの

である。準備段階で地域の実践者を加えたこと、知的障害者の親を対象としたこと、公開講座が大学の授業（「社会教育演習」その他）と連動したものであること、「教育的ライフヒストリー」が社会学や文化人類学の方法論である「語り」の成人教育への応用であること、などがそれである。

この公開講座は、「大学で自分の世界を広めよう—知的障害をめぐる社会的課題解決をめざして—」と題して2003年度に開始され、年度を越えて継続され、2005年度に、知的障害者の親に焦点を当てた講座が実施された。筆者は、この公開講座の目標にも深く共鳴した。①成人の知的障害者への質の高い学習プログラムの提供②講座による大学側（スタッフ）の変容③学習支援者となる学生の体験的学習の場の提供。これは、大学のもつ知的・人的・物的資源を有効に活用し、大学と社会の双方の活性化を期待してのことだという。

このような単に啓発や教養向上にとどまらない双方向的な公開講座が、多くの大学でも試みられること、そして具体的な事例による共感的な相互学習が大学のみでなく公民館等でも展開され、それを通して、「社会的排除」問題に関する深い認識が形成され、課題への取り組みが広がることを期待したい。

(本研究所嘱託研究員 古賀皓生  
教育学・社会教育)